

カントに於ける『自然』概念の 一つの意味

高坂 正 顯

我々が「自然」*Natur*と云ふ概念をカント哲學に於て耳にする時に、直に思ひ到るのはプロレゴメナに於ける著明なる定義、「自然とは普遍的法則に規定さるる限りに於ける、物の存在の姿である。」*Natur ist das Dasein der Dinge, sofern es nach allgemeinen Gesetzen bestimmt ist. W. IV. s. 44.*である。しかしながらこの純粹悟性概念の支配下に立つ自然の外に、尙反省的判断力の對象界に存する自然をも知つてゐる。有機體としての自然が積極的の意味を有し得るのはここに於てであり、自然の知恵なる概念が許るされ得るのはこゝに於てである。「大藝術家、自然 *die grosse Künstlerin Natur* W. VI. s. 446」の奇しき攝理によつて永遠なる平和が將來されると云ふ時にカントの意味する自然も亦同じものである。しかればその自然はいかにして攝理の糸を織りなすか、その目的に導き行くか。この意味に於ける自然をカントの著書に就て主として歴史

的に跡づけんとするのが之の小編の目的である。(引用句はカッシーラ版による)

千七百九十五年にカントは彼の七十歳の誕生を祝つた。「永遠平命の爲に」が世に現はれたのはそのミハエリス祭の當日である。静寂なる書齋裡に世事に迂き老學者が圓かに結んが夢であると云ふ人は云へ。その時を去る凡そ四十年、千七百五十五年より六年に沈てなされた彼の論理學の講義の手控の内にはサン・ピエールの永遠平和の提案は、プラト一の共和國のそれと共に、それ自らに於いては可能なるものなれど、ある見地よりしては、「例へば人間の力によつては」、或は「或る事情の下に於ては不可能なるもの」*“in gewisser Absicht,“ z. B. durch die Kraft des Menschen,“ oder “in gewissen Umständen unmöglich ist.”*として記載されてゐて、彼が既に古くより永遠平和の問題に眞摯なる興味を有せし事を示してゐる。しかして彼の政治的關心はやがてジャン・ジャック・ルソーによつて目覺ましき進歩をなすに到つた。彼は記して云ふ、ルソーは誤まれる余を直した。……余は人間を尊敬する事を學ぶ、そうして若し余がこの考へ方によつて、人類の權利を改新すると云ふ價值が、あらゆる他の考へ方にも附與され得る事を信じないならば、余は卑賤なる勞働者よりも遙に無用なものであ

るであらう」と。千七百六十年の斷片にはプラトール・サン・ピエールの名と共にルソンの名が掲げられ彼等三人は共に「理性の幻想家」Phantasten der Vernunftと呼ばれてゐる。けれど世の人々の稀薄にして且つ屢々下劣なる感情を以つてしては、想像し得ざる程に、原則としての道德感情に熱狂する者は幻想家である」その Versuch über die Krankheit des Kopfes. 1754. の文句の示す如く、彼等を單なる幻想に溺るる者より區別して尊き理性の幻想家となし、しかも尙彼等が現實より離れ過ぎし事を指摘せるものであると思はれる。「彼サン・ピエールは多くの理性を根柢に置きしも、ただその實現に關する理性を缺いた」と一つの遺稿は更に我々に傳へてゐる。かくて彼等三人の名は「それ自體に於ては正しき理念」を追ふ熱狂者幻想家としてその後もしばしば現はれて、前批判期の斷片より批判期の主著へと導く。即ち千七百八十一年かの「純粹理性批判」の現はるるや、彼は經驗の理論を多く分析論より理念の理論を多く辯證論に移らんとするに際して、「理念一般に就て」なる一章に於て、プラトールの共和國について——他の二人の名はここに見るを得ないが——次の如くに語るのである。「世の人はプラトールの共和國をば單に迂儒の腦裡にのみ存し得る空想上の完全状態の顯著なる實例と見做すのである。」しかしこの共和國と云ふ、必然的なる理念をば、「實

行し難きものなりとのあわれむべく且つ恥づべき非難」によつて葬り去るよりも、現在我々を妨ぐる障害は、凡らく人間の本性より不可避的に生ずるものではなく、むしろ立法に際して眞の理念を忽諸に附するより生ずるものなり」と見做し、我々のもつ叡知的なる自由の能力とは、即ちあらゆる障害と束縛とを乗り超へ得る能力なる事を信じ、「適當なる時期に理念に基きて(かかる共和國に導き行く)制度を定め、その實現に邁進すべきものではないであらうかと。即ちここに理性の幻想家の追究せし共和國は、それ自體に於ては正しき理念」として我々の實現すべき理想なる事が明白に現はされ來つたのであるが、永遠平和に關しても彼がほぼ同一の態度をとつた事は推測するに難くない。

かくの如くにして、人類の實現すべき理想としての永遠平和の思想が熟しつつあつた一方に於て、それとある一面に於ては矛盾するとも見得る思想、即ち理想的なるものはそれ自ら、我々の意圖の如何に關はらず、現實の内に現はれ來ると云ふ思想が成長しつゝあつた。即ち理想に逆き價值に戻るものはそれ自ら己が存在を否定して理想的なるものに座を譲ると云ふ思想である。それは、前者が無限に我々を精進に追ひやると反對に、一見我々をして義務の尊嚴を忘れしめ、自然の好意ある攝理の

内に夢睡せしむるごも思はるゝ思想である。

我々はこの明白なる一例として、千七百八十四年の終りにベルリン月報に現はれて、シルレルをして初てカント研究に手を染めしむるに到つた[世界公民的見地より見たる一般歴史考]を擧げる事が出来る。その第七命題の説明の内には次の如き意味の文句が見られる。自然は、戦争によつて種々の慘禍を我々に與へ、各國共に些の油斷もなく戦備に汲々たらざるを得ざらしめ、爲に平和の内に於ても窮乏を感ずるに到り、遂に[野蠻人の無法則状態より脱して國際聯盟に立入る事を餘義なくせしむる]、*Die Natur zwingt.....aus dem gesetzlosen Zustande der Wilder hinausgehen und in einen Volkerbund zu treten.* IV. s. 159 と。而して[あまたの改革の革命の後に遂に、自然が最高の意圖とした所、即ち普遍的なる世界公民的状态が、人類のあらゆる根本的素質が展開さるべき母胎として、實現せらるゝ] IV. s. 163 (第八命題)であらうと。この一編の所々に於て我々は[自然の意圖 *Absicht der Natur*] [自然の知恵 *Weisheit der Natur*] [自然の計畫 *Plan der Natur*] と云ふ言葉に面するのであるが、それは不和を通じて和合を、争闘を通じて平和を將來せんとする自然の攝理 *Vorsingung* を意味するのである。自然は我々に具はるあらゆる素質が無意味な贅物に止まる事を欲しない、我々が有機體であると云ふ事が既に

我々の内なるあらゆる素質が合目的なるべき事を保證する。使用し得ざる機關、無役の組織は有機體の破壊に外ならない(第一命題)。之等の素質は、理性者たる我々に於ては理性の使用に役立つべく定められたものであるが、理性の進歩は無限であり、我々個人の生命は限りあるものであるからして、無限なる理性の使用に役立つべき様に之等の素質が展開させらるゝのは、次々にと滅び行く個人に於てではなくして、「種族としては不死である所の理性者」S. H. N.の總體に於てである(第二命題)。しかし自然は更にそれ等の素質によつて理性が獲得すべき文化の總體が無爲にして彼等の手に落つべき事を欲せずして、彼等の「理性」とそれに基く意志の自由S. I. S. 4.によつて創造されん事を欲する。之れ自然が人類に自由を與へた意味である(第三命題)。されば自然は又之の理性と自由とが安逸なるアルカディアの生活の内に眠り入つて、彼が牧する羊の群の如く愛と満足と平和との階調の内に何等の才能を顯はす事なく無價値の生活に没する事なからしめんとして、彼の性質に屬する巧みなる素質を利用する。即ち人間は社會的生活に於てのみ互の素質の反映を見、彼の間たるの意義を感じるが故に社會を組織せん事を欲するのであるが、その他方に於て、己れ自らにのみを價値を認め、他のすべてを意のまゝになさんとして、言はば他人

を拒けて孤立せんとの傾向を有する。この「非社交的社交性」(die ungesellige Geselligkeit der Menschen) s. 155. あるが故に、我々は一方に於てやみがたき愛著に動かされて社會をつくり他方「名譽欲、支配欲、所有欲」に驅られて争鬪を醸す、而もこの争鬪こそ我々の素質を展開し、我々の理性を目覺さしむる所以のものである。されば彼は云ふ「人間の寛ぎ難き心、嫉妬深き虚榮心、飽くなき支配欲と所有欲とに對して自然に感謝すべきである。」もしも之等をかくならば、あらゆる優れたる素質は人間の内に永遠に轉開されず、眠るであらう。人間は和合を欲する、しかし自然は人類にとつて何が善きかをよりよく知つてゐる、自然は不和を欲する」(s. 156) (第四命題)。かくして遊惰と平安に泥まんとする我々を、我々自らの内にひそむ拍車によつて高き文化に驅りやらんとする自然は、更に我々の素質が健全に成長し得んが爲に、我々を公民的社會の内に置く。そこは我々の最大の自由が、その最も嚴格なる制限と結びつけられる所、自由と強制との併立する所、しかして我々の無拘束の自由が種々の困窮を生ずるの餘り、遂に我々を驅りやる所である。森の樹木が光と空氣とを互に求めん事を競て、反つて素直な成長を見せる様に、公民的社會に於ても我々の素質は互に製肘し合つて圓滿な發達を遂げる(第五命題)。しかしながらこの公民的社會の實現は最も困難なも

のである。人間は遂に一個の動物であつてそれ自ら彼の我意を制禦する他の支配者を必要とし、之の支配者(一人にせよ多數にせよ)も亦人間以外のものであるを得ないから、之の實現は我々が深き知恵、廣き經驗、善き意志を得た後でなければ殆んど不可能の事である。「ただ之の理念への接近のみが自然によつて我々に課せられてあるのである」[S. 158] (第六命題)。しかしながら自然は之の困難なる問題をば他の等しく困難なる問題と同時に解決するのである。我々は自然状態にあつてはその無拘束の自由をもつてかへつて相互の自由を傷け、種々の弊害に耐えずして、例へ不完全なりとは云へ、現今の國家組織に入り來つたのであるが、現今の如き國家關係は即ち自然状態に於けるそれであつて、各國家は、その無拘束の自由よりして常に戰爭状態にあるかの如き状況を呈し、その苦痛より脱せんとして遂に國際聯盟に追ひ入れられるのである(第七命題)。かくして外に國際聯盟のなると共に内に完全なる共和政體も成立し得て、そこに於て人類の素質は完全に展開するに到る。

以上の如き思想を我々が反省の鏡面に映する時に、ヘーゲルの理性の狡智 *List der Vernunft* にも似た面影が浮ぶ。こゝにカントが自然と云ふ言葉に於て意味せんとする所は一箇の理性である。暗き盲目的の自然は理性の手に導かるゝものなる事を

暴露する。自然を動かす力は「悪しき靈」にはあらずして「賢明なる創造主」s. 156である。理性が自らなすべくしてなし得ざる所を彼に代つて行ふ自然である。人間の幸福と不幸とは偶然なる自然の戯れに依存する、我々の行爲の正と不正とは我々の幸、不幸を決定しない、かゝるが故に善と福とを結ぶ最高善は、絶對的なる神の手によつて創らるべきものと要請したカントは、茲に自然そのものが神の御業の一つなるが故に、自然は全體の目的なる最高善に矛盾し得ざるものであつて、寧ろその爲に「秘れたる攝理」の實現をなすつゝあるものなる事を主張しはせぬか。「理性的なる意圖の實現はあの世に於てのみ希望さるべき」sie (eine vollendete vernünftige Absicht) nur in einem andern Welt zu hoffen, s. 165. である事を否定して、「最高なる智恵の大舞臺の一部」をなす「人類の歴史」の内にそれを見んとし、茲に「自然が—寧ろよりよくは攝理が—義とせられる Eine Rechtfertigung der Natur—oder besser der Vorsehung—」s. 165. 過程を窺はんとする以上、彼の神は最早自然を強いて道徳と結びつくるものにあらずして、自然の内に働く神となる。彼の二元論はこゝに破られて人と自然とは一つの目的に向つて進展する。こゝより見れば「あらゆる戦争はたゞへ人類の意圖に於てにはあらずとしても自然の意圖に於ては」新らしき國家關係を將來せんとする試みである「s. 159と彼が

云つた事争はかへつて平和に到る動因である事、而して人類の歴史は隠れたる自然の計畫の實現と見得る」s. 161. 事はむしろ當然である。勿論いかに自然が理性の現はれであるとは云へそこには自由の世界の半面をなす、薄暗きもの、不氣味なるものが見られるであらう。我々有限なる理性者をして、有限なりと云はしむる所以のもの、我々の力をもつてしては遂に如何ともしがたきものが存するであらう。即ちそれが自然であつて文化にあらぬ所以のものがあるであらう。しかしながら我々は、その暗きものが暗きが故に光明の油となり、混沌なるが故に秩序に導く材料となる事、しかして兩者の關係が單に形式と内容、理想と現實と云ふ以上に、内容それ自らが形式を孕み、現實そのものが理想に向ひ行く事を思ひたい。あらゆる形式を内容より取り除く時に、その極限に於て遂に無規定なるもの、定めがたきもの、存せりと云ひ難きもの、其意味に於て存在せざるものに到達する。それは古きギリシヤの哲人が、「空虚なる空」をそれに擬したものの、理想の影を寫すのみのものである。自分はそれを無限に完全なる實在が、その無限に完全なる他の一面に移らんとして、そこに感ずる距離であると考へたい。その空虚を我々は、我と人との間に感じ、我と自然の間に感じ、我に於ける一瞬毎に感ずるのである。之に就ては後に論ずる機會をもちたいの

であるが、此の立場より見れば反價值的なるものはかへつて價値實現の手段とも見
 得る。かの惡を欲して善の爲に働くと云ふゲーテのメフィストフェレスを我々は
 茲に認め得ないであらうか。Ein Teil von jener Kraft, die stets das Böse will und stets das Gute
 schafft. Faust. 1336—37. 善きものも惡しきものも神の智恵に基く。「一見無計畫なる人
 間行爲の集積は一つの組織として現はれる。ein sonst planloses Aggregat menschlicher Hand-
 ungen,.....als ein System darzustellen. s. 164]しかして善の理念を現はす舞臺となる。

之は現實と理想、存在と價値とを峻別する現代の多くの哲學者よりしては拒絶さ
 るる思想であるかも知れない。理想はあくまでも現實を鞭打つ要求に止まり、自ら
 を現實化すると云ふは單なる假構であるかも知れない。しかしながら我々はカン
 トに於て理性的なるものゝ現實的なるものに對する優越の信仰が種々なる形に於
 て現はれてゐる事を忘れてはならない。此の事を看過するならば彼の Idealismus に
 對する深き理解が拒まるゝものである事を信じたい。彼の實踐理性の優位なるも
 のが何を意味するか、彼の自由に依る因果律 Kausalität durch Freiheit が如何にして可能
 であるかは困難なる問題ではあらうけれど、自然の世界の上に自由の世界即ち叡知
 的なるものゝ世界を認めた事、しかも單に二つの世界を認めた以上に、一が他の目的

であり他は一の手段である事、一は實現さるべき形式であり他はその素材なる事を認め、しかしてその如何にして可能なるかは別の問題として、形式と素材とに單なる調和を認める以上に、かへつて Form は formende, gestaltende Prinzip なる事をどいたのは之の事を明に我々に覺らしむるものではなからうか。コペルニカスの轉向の意味が客觀に對する主觀の地位の轉倒を意味するのであり、従つてあらゆる價值と妥當性とが外を巡る客觀に基くにあらずして、内に働く主觀に由來する事を主張するものであり、而してその主觀が規範意識たるの實を有するものとせば、彼の中心思想が理想による現實の支配を目ざせしものなる事は改めて論ずるまでもない。しかしてカントの中心思想がかく理想によつて現實を支配すべきを説きしものなる事を認め、理想主義の根基は彼によつて礎かれたとするのであるが、しかも尙カントの思想をべきより以上に進出せしむべきにあらずとする事はいかがであらうか。はたしてカントの思想は單なるべきに止まり、彼のとく理念は我等に無限の課題を呈出しつゝ、それ自らは何等の力を現實に對して及ぼし得ざるものであらうか。勿論理念の憩ふ世界は叡知の世界である。而してもし自然の世界と自由の世界とを峻別し、自由は叡知の世界のみの事であるとなすならば、自由は完全無礙の世界にのみ

可能であつて、それは神にのみ屬するものとなり、理想界と現實界との中間に存するとも見るべき有限なる理性者の自由、即ち道德の世界の自由は不可能となるのであるが、カントは單に二つの世界を峻別するに止まつたであらうか。之の問題の深き解決は之を第三批判にまたねばならぬのであるが、我々は既に彼の道德哲學に於て之の問題の解決を示唆する思考法に面すると思ふのである。彼は斷言命法の型式を我々に示さんとするに際して先づ、「汝の格率が同時に普遍的法則となる事を意欲し能ふやうな格率に従つてのみ行爲せよ」と云ふ型式を與へ、ついで本來最も廣き意味の自然とは普遍的法則に規定される限りの事物の存在を意味するのであり、自然に於て普遍的法則がその具體的なる姿を實現してゐると見得る事からして、その意味の自然を道德の範型となし義務の普遍的命法はまた「汝の行爲の格率が汝の意志によつて普遍的自然法となるべかりしかの様に行爲せよ」とも云ひ得るであらう」W. IV. s. 279. と述べて普遍的自然法 das allgemeine Naturgesetz と云ふ概念を道德哲學の内に導入し來つてゐるのである。之の「道德形而上學の基礎」に於ける論述は、實踐理性批判に於ける「純粹實踐的判斷力の範型に就て」なる一節に對應するものであつて、そこでは合法性、一般の形式を具體化するものとしての感官界の自然が超越的

自然の範型として用ひ得る事 Es ist also erlaubt, die Natur der Sinnenwelt als Typus einer intelligibelen Natur zu brauchen V. s. 78. が論せられてをり、「普遍的自然律が一切のものを調和的になす」故に、道德は其形式に關して自然律を判斷力の法則となす」V. s. 77 事が明にされてゐる。彼の用ひた例を舉げれば「余は金錢の必要に迫つてゐると信ずる時には、余は金錢を借用して、而して之を返濟する事を約束せんと欲する。たとへ余は返濟の見込の決してあるまじきことを承知するとも」V. 眞と云ふ格率が正しきか否かはそれが普遍的自然法として通用するか否かによつて決せられる。即ちこの格率が不正である事は、今もし自分が困つてゐると信ずる時は、誰でも約束を守らないつもりで勝手な約束を結んでいいといふところを普遍的な法則として見れば、誰も眞面目に約束を結ぶものはなくなり、従つて其目的とした借金も不可能となり、その法則自身が自家撞着を起して普遍的自然法として通用しがたくなるが故に、その格率は不正であると云ふのである。尤もかゝる考へ方に對しては、論理的矛盾が直に倫理的惡であるとは云ひ難しとの非難もあるのであつて、論理的に矛盾しつゝ尙よく倫理的に善たり得る事もあるのであらうが、自分はかへつてここにカントが論理的正と倫理的善との究極の合致を信じた證據を見たく思ふのである。まことに道

徳の世界に於て人格ほどに尊きはない、之の世と言はず、之の世の外と言はず、無制限に善と呼ばれ得るものは善き意志 *ein guter Wille* IV. s. 249. を除いて外にはない。而して人格は一以つて他と換へがたき事の特質とする。我の行ふべき事を彼が行ひたりとて我の義務ははたされたのではない。義務の轉嫁は許るされない。道德の世界に於ては、代人は認むべくもない、隣人の義しき行爲は以つて我を義しとはしない、一人はとられ一人は残さるべきである。一以つて他と換へがたきを特色とする人格の世界に於て、彼に對しては義務ならぬ事も我に對しては義務であり得る。今日こゝに我に對して義務たる事が、明日かしこに於て彼に對しては拒けらるべき惡となる。精進やむ事なき道德の世界に於て、はたして一定の内容をもつ格率を立つる事すら可能であらうか。無限に異なる人生の課題に次々に面する我々の經歷に於て一定の内容をもつ格率に固着するのは *Moralität* の世界を去つて *Legalität* の世界に墮する事ではあるまいか。道德の世界が法律の世界のあなたに存するのは、一定の格率を定めがたき所にありはせぬか。よしそれが合法性一般の形式に關してなりとは云へ、感覺界の自然を超感覺界の自然の範型となすのは、自由の世界を自然の世界に墮さしめるものではあるまいか。

以上の議論に對して承認すべき多くを認めつゝも自分は次の如くに語りたい。そもく道德が行はるゝのは如何なる世界に於てであるか。絶對に完全なる存在者のみの存する世界には更に求むべき理想がなき故に、こゝに道德を多くの要はない。又何等の理性を有せざる動物に向つても、道を多く事は不可能である。かくして道德の行はれ得る世界は有限なる理性者のみの世界となる。しからば有限なる理性者とは如何なるものであるか。カントは道德の可能を救はんために「いかにして人は、彼が避ける事の出来ない自然必然性の下にたつ所の同一の時間に於いて同一の行爲に關して全然自由であると云はれ得るであらうか」(V. V. s. 105.)と云ふ問に對して、人間は一面現象界に屬すると共に他方「物自體」として直に叡知界に籍を置くものなるが故にと答へるのであるが、もしこの全く性質を異にする二つの世界に屬する我が單純に相互に無關係なる二つの我に分れ去るものなら、そこに既に一個の人格を多く事能はず、同一の事、同一の時に於いてと云ふ事すら全く無意味にならざるを得ない。道德の主體は「純粹なれど、様々の要求と感性的の原因に動かされ得る者」(ein rein, aber mit Bedürfnissen und sinnlichen Bewegungsursachen affiziertes Wesen. s. 37.)と云ふけれども何等かの關係を兩界に考へずして言ひ得ざる事である。もしも人間が

まことに als zu beiden Welten gehörig. s. 96. と考へらるべきならば、逆に二つの世界が人性に属するのてなければならぬ。人間が二つの世界を抱攝するのであつて、二つの世界に人間が抱攝されるのではない。人間が二つの世界に属すると云ふのは、二つの世界に属するものと見得るに止まる。感性的のものとし、叡知的のものとする遂に一つの見方に過ぎぬのであらねばならぬ。

要するに兩界に何等かの關係を認め、その關係あるが故に初めて道德の世界が生じ來るとするならば、その關係に對して何事か積極的な内容を思念する事は許るされない事ではないであらう。それがよし單なる臆説、且つ單なる假説 *nur Meinung und bloss Hypothese* W. VI. s. 396. に止まるにして何事かを我々は信じたい。理性は我々の本質である、自然の世界に於て彼は自然の立法者である、倫理の世界に於て彼は自ら實踐的となつて道德の世界を現出する、彼も理性であり之も理性である以上兩者に矛盾の存する事は許るされない、それは理性そのものの自殺である。理性が理性を信賴するのは即ち理性の自律である、自己に由來せざる理性は理性ではない。自由の世界の立法者たる理性は、彼の他の一面なる自然の立法者を信賴し得ねばならない。ましてカントによつて初めて自然界の論理的構造が明白にされ、悟性が彼の(先

天的法則を自然より汲むにあらずして、自然に法則を規定するものである」IV. s. 72. 旨が説かれた以上、我々は彼が歴史の世界に對しても同一の態度を持した事を信せねばならない。自然の世界が外から我々の本質と無關係に與へられるのではなく、我々の悟性の能力によつて産み出されるのである様に、歴史の世界も既に過ぎ去つた出來事として獨立に存するものではなく我々がある特定の態度をとるに對應して生すべきものでなければならぬ。即ち永遠に等しき事のみの反復さるゝ自然界の單調を去つて、人間の行爲をば神の計畫の實現さるゝ姿と見、理念によつて一つの體系にまとめらるゝものと觀する時に現はれるものでなければならぬ。平面的なる自然界を去つて、層一層をなして高まり行く建築物を見得るだけの高みに立つた時にそこに初めて歴史が現はれる。そこに於ては一々の行爲は神の計畫に參與する、理念の實現に對して何等かの意味をもつ。かゝる人間の歴史と關係する限り所謂自然も既に理念の抱攝の下にある。理念を促進するものも理念を妨害するものも、理念に關係するが故にのみ歴史の一員である。従つてそこには既に自然と人(自由)との對立は止揚されて、理念に對する等しき實現の手段が見られる。先に自然界と叡知界とは共に理性の創造によるものなるが故に兩者に矛盾の存するべからず

らざるをといた我々は、こゝに歴史の世界に於ては兩者は共に理念の實現に關與する限りに於て同じき方向を辿る伴侶なる事が教へられる。しかればその理性とは如何なるものであるか。それが單に抽象によつて見出された概念でなく、従つて又單に個人の頭中に存する個人的のものでなき事は、既にそれが自然の立法者なる事によつて明であるが、其が實踐の世界に於ても單に個人的のものでなき事を忘れてはならない。あらゆる民族とあらゆる國家とを貫らぬくものでなければならぬ、抽象的なる普遍にあらずして具體的普遍でなければならぬ。かく見る時に、彼が「世界公民的見地より見たる一般歴史考」に於て個人より重心を民族に移してゐる事に深き意味を認めるのである（本誌第四十四頁）。以上の如くに理論理性と實踐理性とに調和を認め、各民族を或る意味に於て理性の實現であるとする以上、一見單なる自然必然の過程にすぎざる各民族の争鬪を通じて遂には理想的なる制度が實現さるゝと云ふのは、むしろ當然の事ではないだらうか。我に於て善が勝つべきか惡が勝つべきかと問へば、何人も善が勝つべきを信ずると云ふであらう。しかしてそれを信じて行爲するのが、私の義務であるとするれば、それを移して民族にあてはめ、その終局に於て善の勝利を信ずるのは、之又やはり我々の義務ではないだらうか。カント

によれば「永遠なる平和の實現は實踐理性の要求として我々は之を信せねばならぬ、之を信ずるは義務である」(朝永博士、カントの平和論、百二十三頁)と云はるべきである。今この民族の争闘に現はるゝ不正と不義とは、その自然必然の過程を通じて實踐理性の要求する所に導かれ行くと云ふ思想から、その時間性と歴史性を奪つて、之を論理の形式に於て示すなら、不義不正なるものは自己自らに矛盾するもの即ち普遍的自然法となり得ざるものなる事を示すのであつて、先の範型の議論に導き行きはせぬか。無限なる時間の流れの内に現はるべき所の事を、完全なる普遍性に於て生せしめ、即ち普遍的自然法たらしめて見ると云ふ事は、一は時間を離れた思想上の實驗であり、他は時間に於けるその實現であると云ふだけの差ではあるまいか。正しきものは自ら保たれ悪しきものは自ら朽ちる。論理に於て正しきものは他と矛盾せざるもの、歴史に於て價值あるものは自らを保ち行くもの、他との軋轢のために滅びざるものである。之は餘りに樂天に過ぎるとの譏りもあるであらう。カントの永遠平和は歴史上に現はれ得る一事實ではなく、達し難き理念であるとも云ふであらう。しかしながら歴史がまことに一つの歴史となるのは、それが一つの意味に統一せられ得るがためである。その意味は理念に基き、理念は實現を要求する。

永遠に實現と無關係なるもの、否實現に逆ふものを通じて我々は理念を認め得ない。常に理念に逆ふものを通じて我々に現はれるものは、理念ではなくして魔王である。意味にあらずして無意味である。無意味によつて意味ある統一を形成する事は出ない、惡によつて歴史は構成せられない。惡に何等かの意味の與へられる限りその意味は善より來る、即ち既に理念の内に收められた惡である、それは善の一面である。かく見れば理念は時間の内に於て實現される、否、時の推移が自ら理念を實現させる、單なる時間に理念實現の力が附與される事になるのである。時間そのものに價值實現の力を與へる、それは餘りに獨斷ではないかとの批評もあり得やう。しかしながらこゝに於ても我々はカントの批判主義の立場から、時間が我々を離れてあるのではなく、時間が我々の内にある、さればこそ單なる自然の時間の奥に歴史の時間を我々は含む事が出来るのであると我々は言ひたい。否理念との關係を含む時間を思惟した時にのみ歴史が現はれる。時間が理念の手段となつた時、初めて外に、我々は歴史の世界を認め、内に、道德の世界を認める。そこに於て偉大なる事件を外に眺め、偉大なる事件を心中に産む事が出来る。理念を知らざる人に、而して理念のため、に勞せざる人には、常に平凡なる繰り返しのみがあつて、眞の生命は存しない、従つて

歴史もなく成長もない。かくの如き立場よりして理念の力を信じ歴史の可能を許す時に、悪が自らを殺戮して善の犠牲となること云ふのは當然の事となるであらう、その時にのみ歴史が存するのであるから。かくして我々は云ひたい、「世界の歴史は世界の審判である。Die Weltgeschichte ist das Weltgericht.」¹⁷⁾

かくして之の範型の議論に含まれた思想は、悪は自ら悪と衝突して、善にその席をゆづるべく共に本来の無に歸し去り、善はこゝに自ら實現され來ると云ふ思想と聯關するものと信するのである。之の争闘を通じて平和に到り、不完全によつて完全に到ると云ふ思想は、あらゆる混沌の内に法則の支配する事をといた彼の最初の重要な著書 *Naturgeschichte und Theorie des Himmels*, 1755. の内に既に窺ひ知るを得るのである。

太陽の周囲を巡るいくつかの遊星はそれらの衛星を伴つて一つの太陽系に結ばれる、我々が恒星と名づくるものは、實はそれ自らかゝる一個の太陽系に外ならぬ。無限の天空に鑽ばめられた金の鋳はこゝに、偉大なる造物主が思を凝らした太陽系である事を明にする。しからばこの調和せる無数の體系は、相互に如何なる關係に立つのであるか。彼等は相互に獨立なる體系として、「あらゆる天界とその天

界とを秩序なく無意味に満すに過ぎぬものか」alle Himmel und aller Himmel Himmel, 彼等の間には何等の法則も支配しないのか。「それ／＼の太陽を巡る遊星を結合してゐた組織は恒星の群の間に於てはその姿を隠くすのか」S. 249. 彼は、天の河が一つの中心面に結合さるゝと云ふ事と、恒星が相互にその位地を變ずると云ふ事とから、恒星はより高き秩序をもつ遊星であつて、我々の太陽系に於て小規模に現はれた組織が大規模にこゝに現はれたものである事を論じ、更に星雲をば我々の銀河と類似のものとし、遂に全宇宙をば、「我々の概念のいかなる能力も及ばざる、眞に不可測の深淵であるとなしつゝ、しかも一個の無限に大なる組織體と見やうとする。かくの如くに無限なる空間が無限なる統一を含むとなした事は又無限なる時間についても語られねばならない、彼が限りなき組織を横に展開するなら、之ははてしなき統一を縦に流轉せしめなければならぬ。「始まりと源みなもととをもつあらゆる有限なるものは、限られしものなる事の徴しるしをもつ、彼は流れ去つてその終りをもたねばならぬ」S. 300. としても、之の消失によつて自然の無限なる豊饒さが損せられてはならない、自然の壯麗に汚點が印せられてはならない。空間に於ける無限なる混沌がかへつて無限の統一を指示する様に、時間ときに於ける無限なる消失は無限の完成を意味せねばなら

ぬ。彼は云ふ「たゞ一日の寒さのために、どれほどの花と昆虫とが破壊される事であらうか、自然の美はしき作品であり、神の全能の證據である之等のものが。しかし我々はそれを悼まない。どこか他の所でこの損失はあり餘るほどに償はれて行くから」^{s. 330}と。萬物の主である人類も一羽の雀も神の眼には同等である、銀河も太陽系も一粒の砂と選ぶ所がない、してみれば務を終へた星宿が淡き光を殘しながらその跡をかくすのは、秋に木の葉の散るに等しい。「自然の豊饒さはその亂費によつて證明される」^{s. 330}。次々にとコスモスがカラスに没入するのは、次々にとコスモスが再生し來らんだためである、無限なる秩序が創造されんために、有限なる秩序が破壊されるのである。自然は到る所に於て不完全と缺陷とを暴露してゐるが、その缺陷こそ限りなき豊饒を産む源である。「缺陷こそ豊饒のしるしである」^{s. 341}。

かくして我々は自然の示す有限と不完全との奥に、自然の無限と完全とを見る事を許るされる。「有限なる事物への捕はれより放なれた不死の靈魂が、無限者との合致の内に眞の幸福の享樂を見出すのはこの故であり、「世の事物が壞れ去つては醸し出す荒廢の有様を云はゞ足下に眺むる高地に立つて」^{s. 324}「あらゆる完全の根源と合致する」^{s. 324}時に言ひ様もなき幸福の感情が我々を襲ふのはこの故である。

我々があらゆる有限なるものを飛躍して、全自然に對して新らしき關係に、立ち入る時に隠れたる調和が到る所に現はれて「自然はあらゆる方面に於て、ひたすらに搖ぎなきものであり、ひたすらに端正なものとなる。」朗らかなる夜、星鑽ばめる空を眺むれば、高貴なる心にのみ感ぜらるゝ満悦の情が興へられる。一帯の自然が靜まり、我々の心も休まる時に、不死の靈魂の隠れたる認識の力は名づけ難き言葉を語り、感ぜらるゝのみにして記述されざる、ほぐし得ぬ概念を與ふ。 s. 369. こゝに於て無限の混亂は無限の端正への道となる。個々のものゝ没落に我々は新なる創造の意味を認めるのであるならば、無限の時間の内に現はれる端しなき没落に對しても、無限の創造を認めねばならぬ。それは「永遠の運命が自然の全體に規定した」の所のものである。空間に於ける混沌が統一を指示すると云ふ思想を時間の上に移して、有限なるものゝ没落は無限なるものゝ完成を旨ざすとすれば、之は歪める情熱は自己を實現せんとして互に他を否定し遂に正しきものに達すると云ふ思想と如何に類似する事であらうか。有限なるものは有限なるが故にその必然の没落を受け、こゝにかへつてその無限なるものゝ意味を實現すると云ふのは、惡は惡なるが故に互に滅して正しきものに席を譲ると云ふに如何に類似する事であるか。もし

も我々の惡が我々の有限性に根ざすものとせば、有限なるものが無限なるものゝ意味の實現のために没すると云ふ事は、缺陷が完全なるものゝために、惡が善のために没すると云ふ主張と一つに歸するものと思はれる。

若きカントに現はれた自然の攝理に對する信賴の念を顧慮し、批判期の道德哲學にその異なる表出を見た我々は、再び千七百八十年代のカントに歸る。その時代の一つの遺稿には、最後の手段は善き國際法。萬民法。サンピエールと書かれてあり、尙人性論の講義の内にはドイツ聯邦がかゝる國際聯盟の中心を形成すべき希望が述べられてゐる。但しそれ等の國家は、一つの普遍王國に結合されるのではなくして大なる國際聯盟に統一さるのである。そこでは各國共に國內は豊饒となり秩序は整ひ、各國共に一中心をなして、それ〴〵に他國の維持に關はり、如何なる國と雖も他國に損害を加ふる事によつて増大する事は出來ない」その有様は獨立せる諸々の學術が互に他を利しつゝ共同するに等しい。「一般歴史考」の著名な文句は、「その状態は、さながら自動機械の如くに自らを維持し得る」IV. s. 159. ものなる事を語るのである。

千七百八十九年にフランス革命が起つた。かつてアメリカ獨立戰爭千七百七十

六年)に同情ある眼をむけて、英人グリーンとの興味ある逸話を我々に殘したカントは、こゝに彼の政治的理念共和政體の實現に關する悲壯なる實驗を見て深く動かされたものゝ如くであつた彼の傳記者達の傳ふる所、しかしてもしフォレンダーの所説の如くならば、その翌年にあらはれた判断力批判の内には既にその影響を見る事が出来ること云ふ。即ちフランスに行はれつゝある完き改革は民族をして初めて國家たらしめる所以の範型共和政體を示すものである。その國家組織に於ては各員は單に手段たるのみでなく、又同時に目的である、各員は全體を可能ならしめんとして共同するが故に、全體の理念によつて再びその位地と機能とに關して規定されねばならない。即ちその國家は一個の有機體を構成するのである。Kant und der Gedanke des Volkerbundes, s. 28, von Karl Vorländer. 自然の必然性の連鎖が無限につながる様に、有機的なる連鎖も切斷される所があつてはならぬ。單に部分的に一小局部に見られた合目的性は合目的性たるの意味を失ふに到る。まことに自然の施設が部分的にのみ合目的であつて、全體に於ては合目的ならずとするのは、はたして理性的であるだらうか」W. IV, s. 100. と疑はるべきである。今、自然の必然性の連鎖が一次元のものであると云ひ得るならば、有機的なる連鎖は三次元的であると云ひ得るで

あらう。自然必然の變化は平面的であるが、後者に於ては、その各部分は一互に有機的に變化して一全體の意味を現じつゝ、その全體は更に高き一全體の部分たるの機能を示すが故に、その變化は立體的である。かくして個人は一國に於て、統一され、各國は集つて國際聯盟を形成する。之れ即ち有機體たるの實を明にするものである。

判斷批判力の「自然の終局目的に就て」なる一節に云ふ。自然の終局目的 der letzte Zweckをもし、地上に於ける幸福、即ち自然によつて人間の内及び外に可能とさるゝ目的の總體 die Glückseligkeit auf Erden, worunter der Inbegriff aller durch die Natur antzen und in dem Menschen möglichen Zwecke desselben verstanden wird; W. V. s. 511. とすれば人間は自然の制約に依存するものとなつて「自分自身の存在を最終目的 der Endzweckとする事が不可能」となる。従つてむしろ「自然を手段として用ひ」「いかなる任意の目的にもたえ得るだけに理性者の能力を開發する事、即ち文化」が終局目的とさるべきである。しかしてこの文化は「人類間の不平等」によつて達せられる。即ちある少數のものゝのみが科學と藝術とに閑散な安易な日を送り、他の多數のものは器械的に日夜勞して何等の享樂にも與からず以つて彼等の犠牲となる。尤もかくしつゝある内に、高等の文化が下層の人々の間にも及ぶのであるが、その弊害も亦増加する。こゝに於て内に

は不満がみなぎり、外からの攻撃も亦起る。しかもこの「燦爛たる悲惨 das glänzende Elend」の内に於て人間の素質が磨き出されるのである。即ち「互に抗争する自由の軋轢に對して、公民的社會と呼べる」一全體の合法的なる權力が對立させられる。しかしこの公民的社會に於てのみ人間の素質の最大の展開が起り得るのである。しかしながら完全なる文化に達せんためには、更に世界公民的全體、即ち多數國家の聯合が必要とされる。「もしもそれを缺くならば特に權力を握るもの」(名譽欲、支配欲、所有欲のために)かゝる計畫の可能をすら阻む障害が起り、遂に戦争は避くべからざるに到るのである。戦争は、諸國家の自由を許す合法性と、それによつて更に諸國家の、道徳的基礎を有する體系的統一とをたゞへ建設せずとも準備する企圖である。それは人類の(奔放なる欲情に驅られたる)無意的の企圖ではあるが、最高なる知恵の深く隠されたる恐らくは有意的の企圖である。……der (Krieg), so wie er ein unabsichtlicher (durch zügellose Leidenschaften angeregter) Versuch der Menschen, doch tief verborgener vielleicht absichtliche der obersten Weisheit ist, Gesetzmässigkeit mit der Freiheit der Staaten und dadurch Einheit eines moralisch begründeten Systems derselben, しかして「文化に役立つあらゆる才能を最高の程度に開發させる發條である」(B. V. s. 313. もして我々人類に災する種々の禍悪が、一

部は盲目的なる自然の惡戯により、一部は頑迷なる我々の我欲によつて、かへつて我々の魂をそれ等のものゝ桎梏より放たんために齎され、「魂を奮起せしめ強め、鍊ふる所以のもの」*the end*となる以上、戦も亦我々をして戦を棄てしむるものと云ひ得るであらう。争は萬物の父である、されば又平和の父ともなる。こゝに於て自然の目的は我々の動物性に屬する傾向性をそれ自らの手によつて馴致せしめ、人類の發展への道を開かんとするにある事が明になる。たとへそれが「我々の目的ではないにせよ、自然の目的はかくして達せられる」*the end*のである。我々はこゝに再び、反價値的なるものを通じて價値が、傾向性によつて道德的理想が、自然を通じて自然を支配する文化が産出せらるゝのを見るのである。

判斷力批判を去る三年、千七百九十三年、「理窟は尤もであるが、實際には役立つぬ」と云ふ俗言に就てなる興味深き論文が現れた。その第三節に於て「國際法に於ける理論と實際との關係を論ずる所を我々は見んとする。「自由の歴史は惡より始まる、人の業なるが故に」と云はれた人類の過去をふりかへる時、そこには常に幸福と不幸、善と惡、理知と無知、信仰と迷信とが等しき割合を以つて現はれてゐるのを見るのである。燦爛たる文化はいつか消へて暗黒の無知に没して行く、文運の隆盛と云ふも

一時の事、やがては昔に劣らぬ荒廢が跡を領する。永遠の濱邊に寄する浪の満干の様に、人類の歴史は一進一退をくりかへす。ここに人類の進歩を見る事が出来るであらうか。どこに神の攝理を認め得るか。メンデルスゾーンのこの懷疑的な主張に對してカントは答へる。けだかき心情ある徳行秀でし人が、次々にと逆境に打ち勝ち誘惑を退け行くのは神の見て喜び給ふ所、人類が常に善たらんとして惡に墮落し行くは心ある人の耐へ難き事である。一時の戯れとして之の悲劇を見ることはさすがに涙多く感深きものではあらうが、どこしへに徒らな努力と徒らな破壊とを見せられては、遂にこの單調なる「道化芝居」W. VI. s. 393. に幕の降されん事を希ふに到る。罪に罪を重ねて最後の處刑をまつのは「賢明なる世界の創始者、且つ統治者の道徳にも違ふ」のである。されば我々は文化がたえず善き方へ進歩しつゝある事を信じ得るであらう。「時に途絶える事はあらうとも絶へ果つる事はない」。しからずと云ふ人はその證明を企つるがよい。よし過去の歴史が單調なる興廢の反復であるにもせよ、短き過去の歴史を以て長き將來を推す事は許るされない。否、かゝる事を云ふ人すら、己れの説を正しとして後人を導かんとし、己れの屬する國と文化とを促進せしめんとするのではないか。たとへ一歩を譲つて過去の歴史が惡への墮

落に外ならなかつたとしても、善をなせ」どの道德律は維然としてその力を失はない。しからば善への絶えざる進歩は如何にして維持され促進されるか。無限なる將來に及ぶ之の結果を、有限なる我々の知恵と力とに期待することは、望み難き事である。「彼等人類はその計畫に際して單に部分より出發して、遂に部分にのみ止まり、彼等人間にとつては餘りに大に過ぎる全體そのものには、その理念をこそ及ぼし得れどその影響を及ぼし難き」が故に、「その作用を全體に及ぼし、全體より部分に及ぼす攝理」にこそ期待すべきである。「やゝもすれば我々が背き去らんとする軌道の中に強いて我々を導き入れんとして、人間性が我々に於て、我々に依つて爲さんとする所のもの dem, was die menschliche Natur in und mit uns tun wird, um uns in ein Gleis zu nötigen……」s. 395. に依存すべきである。各國の文化が進むと其にかへつて狡智と暴力とによつて他國を支配せんとする傾向を生じ、戦争は複雑となり、戦費は重み、常備軍の維持にすら多額の費用を要し、有り餘る國債に耐えかねて、やがては戦争に對する嫌惡の情が國民の内に漲るに到る。かくて戦あるべきや否やを決する權利は君主の手を去つて國民の手につり、共和政體が出現する。之れ即ち善き意志が爲すべくして爲さざりし事を、無力が遂に果たさねばならぬ so muss, was guter Wille hätte tun sollen, aber nicht tat,

endlich die Ohnmacht bewirken:」s. 396.に到つたのである。内に現はれた神の攝理は同時に外にも現はれる。内なる共和政體と外なる國際聯盟とは同じ一つの神の手の制作である。一羽の雀の重みのために、忽ち平衡を失するスウィフトの家s. 397.の如き、微妙な勢力の均衡による平和の代りに、權威ある國際法が現はれねばならぬ。「之は尤もたゞ憶説であり、單に假説であり」s. 396.はする。しかし「惡の生じ來る所以をなす傾向性の相互の争闘は、理性をして、傾向性を隷屬せしめ、自ら碎け行く惡の代りに、一度現はれし上はどこしへに自ら保れ行く善をして支配せしむるの餘地を開く」のである以上、我々はその攝理にたより得るのであらう。s. 397. カントは云ふ「余は法の原理より出發する理論に信頼する、……同時に又、人の喜び赴かざる所に人を驅りやる事物の性質に信頼する、*zugleich aber auch auf die Natur der Dinge, welche dahin zwingt, wohin man nicht gerne will.*」s. 398.「わ?」

同年單なる理性の限界内に於ける宗教が出版された。そこには、「神の國は我等に來れり」と云ふ歡喜の叫びが「たとへその現實の建設は尙我々の無限のかなたに横はるにもせよ」「地上に於ける(神)倫理的の國への推移」の希望が抱かれ得る限り叫び得る事が述べられてゐて、「我々の眼には認められざるも、絶えず善の原理が……:」s. 268, 9, 270. するために働きつゝあることが語られてゐる。(未完) (十四年十一月十四日)